
天の川が見えた8月

中野柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天の川が見えた8月

【NZコード】

N4447V

【作者名】

中野柚

【あらすじ】

それは8月にだけ現れる、夢の天の川、

会うたびに織姫を忘れる彦星と彦星を想い続ける織姫の切ない恋…

まあだんだんと切なくなくなるけどねつ　B y主人公(女)
え…！？いや…まだはつきりと最後まで決めてないんですけどB y

主人公(男)

”君”が夢に現れるのは8月。 ”君”は私と毎回会つてこるので、いつも私のことを忘れている。

最初はそれがすじく寂しかった。でも、そのつちだんだんと慣れてきてしまつた。

今はもうそんなことで落ち込んで時間を無駄にしないようにして、いっぱい君と話している。

でも…やっぱり起きている時は今でも落ち込んでいるんだ…

少女 side -

「…ねえ、ちやんと聞いてんの…?」

「ん? あー…まあ…。」

「せつかく人が本当のことを教えてあげてんの?」

「だつて…僕たちさつと会つたばかりなのにこきなつそんなこと聞かれたつて…」

「…違うよ…。私たちが会つたのはこれで65回目だよ…」

だつて今は8月3日。私達が会つたのは3年前。

この話をしたのは63回。最初に会つたときは本当にはじめましてだったし、2回目はデジヤブなのかと思おうと頑張っていたから…

「でも例えそうだとしても証拠はないじゃん。」

「でも…でも…」

信じて欲しくてなにか言おうと考えていたそのとき、また”君”は私の夢の中から消えた…。

-少年side-

小鳥が鳴いている。母さんは今日も朝早くからパンを焼いているのだろう…香ばしい匂いがする。

「うん、今日もいい天気だ。」

8月はいつも寝覚めがさっぱりする。なんでだらり…？
僕が8月が大好きだからかな？

なんで？？そりやあ8月はもうオール夏休みと言つていい月だし…
月…だし…あと…なんだろう？

それだけなんだけど…なのに僕はすくなく8月が好きなんだ。

…そうだ！！いきなり話を変えるけど、僕には宝物があるんだ。昔…
・といつても3年くらい前、7月7日の七夕の日。お祭りの屋台で
ブレスレットを買った。それはとても綺麗な色をしていて、一目見
て僕はそのブレスレットを買った。女っぽいって友達から言われた
けどそんなの全然気にならなかつた。そんな友達の言葉よりもブレ
スレットの美しさに魅入つていたんだ。それは僕の一一番大事なもの
だからいつも身に付けている。今日もそれを手につけて僕は図書
館まで自転車をこいでいく…ハズだつたんだけど…

-少女side-

朝。私は氣だるく起き上がる。

はあ…また今日も…いや昨日も…か…信じてもらえなかつた。

「全く…いい加減信じなさいよ…つのつ…！」

思わず、両腕を振り上げて人形に枕を投げつけてしまつた…。

その衝動で腕のブレスレットがかすかに揺れる。これは3年前の7
月7日にもらつたものだつた。といつても、そのときに母がアクセ
サリーの多い屋台を出していくて手伝いをしてくれたら売れ残つたア
クセサリーをひとつだけくれるというので頑張つて働いてもらつた

のだ。いわば、人生最初の給料みたいなものだ。

と言つても、今の私はまだ高校生なので、まだ、給料なんぞももらつたことはないのだが…。

ま、そういうことで私は今日も走つてパン屋まで行く。あそこのおばちゃんには小さい頃からいろいろとお世話になつていていろいろとオマケしてもらつているのだ。だから私の行きつけはあそこなのだ。

よしー！今日も頑張つて一田行くぞーーーー！

パン屋に arrivé と、店の前で男の子が自転車の近くでなにかをしていた。

パンクでもしたのだろうか… そう思いながら男の子の横を通りパン屋に入ろうとする…

「ねえ、君…あの…そのブレスレット…えつと…どこかで拾つたの…？」

「…はー? なに言つてんのー? これは昔、母からもらつたのよ…」
なんだ! ? 「イツ…いきなり人のブレスレット指差して…

もつと文句言つてやるつかと思つてソイツの顔を見ると…

ソイツは夢の中の”君”に似ていた…

No · 01 Zwei Beharrlichkeit (前書き)

母からもらった(?)ブレスレットをいきなり拾つたのかと聞かれてムカついた主人公(女)。相手の顔を見て文句を言ってやろうとみるとその顔は夢の中出てくる”君”の顔にそっくりで…！？

「あ… そうですか… すみません…。僕がもつていたものによく似ていたんで…」

そういうつていきなり謝つてきたソイツ。やつぱり似ていてる…

「… もういいわ。それよりアンタ…！…名前は？？」

「あ…僕ですか…？僕は弘人。弘人って言います…！…あなたは…？」

「私は凧乃。宇野 凧乃つていうの。」

…つて言つてもあなたはきっと明日には忘れているのかな… でもこれは現実…なら、もしかしたら……！

「あ、あの凧乃さん…」

「呼び捨てでいいよ、大体、 同い年ぐらいじゃない。」

「あ、はい。じゃあ… 凧乃…、そのブレスレットと似たやつを近くで見なかつた…？」

「見てないけど… あなたも持つてるの…？ つてことは世にお祭りの屋台で買つた…？」

「え…あ、あの…」

ドギマギしてる… つてことは買つたけど、男の子がこんな女っぽいのを持つてたら恥ずかしいと想つてるのかww

「こ…らへんで落としたの？」

「は…」。図書館に行く途中だつたんですけど…。

「…探すの手伝つてあげる…。」

「………ありがとうございます…。」

そうしてだんだんと時間が経つてこき、お互近くなつた。

、と…

「あ…あつた！ ありましたよ… 凧乃…！ 見て…ほら…。」

振り向くとともに嬉しそうな弘人の顔が近くにあつた。

思わず赤面しそうになつて顔を横に向けながらも私は、
「よかつたじゃない。」

そう言つことはなんとかできた。

そしてその「プレスレット」を間近で見ると……私のとよく似ている。
もしかしたらこの「プレスレット」が私たちを会わせてくれたのかもし
れない……

お母さん……あなたにもらつた（給料……いや）「プレスレット」はもう
最高です……

そうお母さんを崇めていると……

「手伝つてくださいがとうございました……もしよろしけれ
ば家でお食い飯を食べていきませんか？」

「え……いや……『ぐ~ぎゅるぎゅるうつ』……お願いします。」

お腹は正直だつた……くそつ……弘人君は笑つてしまつたのをじらふ
よつと必死に頑張つていた……

No.02 Sie wer erinnern nicht daran (

いつもして家に帰った私は夜になり眠る

「あー！弘人君！」

「…どうして僕の名前を知つているんだい？」

「え…だつてお昼会つたじゃない、それにご馳走になつたし…」

「…人違ひじやないかな??だつて僕は今日、自転車がパンクしていきょうがなく歩いて図書館に行つて…うん、やつぱり君みたいな人には会つてないよ。」

「え…いや…でも、ほらそのブレスレットー私とおそろいの…！」

「それなくしてたじやん！？」

「いや、これはなくすはずがない！だつていつも手につけているんだ、無くすはずがない。それにはなぜ君は僕と同じものを？これはあの時… - - - - -」

弘人君の言葉が頭に入つてこない…。現実であつたのだから今度は覚えている…そう思つていた私には痛い仕打ちだつた…。そんな…夢の中のことだから忘れているとしか思つていなかつた…また明日、現実の弘人君に会つて…。それで私のことを覚えているか訪ねて…？できるかな…だつてもし現実の弘人君も私を忘れていたとしたらそれは辛すぎる…。

「あ・・いいや、また…ね…。」

「 - - - - - - - - - - -」

弘人がなにか言つている、でもそれは私の頭には入つてこず、朝の光の方が私の眼に入つてきた…

「弘人君に会わなきや…！…会つて話を聞かなきや…」

私のこと忘れないよね…！…つて…？ふふつ…いきなりそんなこ

と聞いてもし覚えてなかつたらどうするの？

もう一人の私の声が聞こえる…、それでも聞きた…－ちゃんと会つて話を聞きたい…！

その心中で思ひつゝ、私は立ち上がって仕度を始めた。

第一話 瞬りから解き放たれた少女（前書き）

私を思い出して……何回も耐えた”はじめまして”
辛かった、苦しかった…でも、もういいよね? もう…いいんだよね

⋮

第一話 眠りから解き放たれた少女

足が進む、自分で止める事などできないのではと思わせるほど速い。

焼きたてのパンの匂い…もひるまで来たのか、自分でモモツモツついた。

はあつ…はあ、はあ・・はあ…つ。

喉が痛い、焼けるよ！アツー…それでも喋らないと…聞かないと…弘人君に…

そう思つた後に私の意識はふとそこで途切れた。

「…の…凪乃…！…凪乃…！…目を開けてください…！…凪乃…！」

ダレ？私の名前を呼ぶのは…

だるいの、もう…何年も頑張つた。なのになんで君は思い出してくれないの？？

私頑張つて明るく振舞つた！なのに…なのに…繰り返される”はじめから”。何度も・・何度も…それはまるで螺旋階段のようだつた。

もう…こんなに辛いことが繰り返されるなら…私も君のようになってしまおうか…そ、起きて！凪乃…！君は忘れちゃいけないんだ…忘れたらこの時間は最初からなかつたことになつてしまつ…「嫌だ…そんなの嫌だ…！私の頑張つて…頑張つた時間がなかつたことに

なつてしまつなんて嫌だ！！嫌だ！！！

「ん……、弘人・・君・・？」

視界がだんだんと回復してくる。そのとき最初に映ったのは弘人君の顔で、次にはブレスレットだった。

「凪乃！！よかつた……だんだん呼吸回数と心拍数の減りが見えてきて……怖かった……」

「そんなことよりブレスレット……なんで……夢・・なんで……？なんで……覚えて……？」

気づいたら泣きそうになっていた私。その言葉は支離滅裂でうまく伝えようと思つても伝えることができなかつた。

「凪乃？……ブレスレット？夢？……」

私の言葉の断片を聞いてなにか考えている君の顔もだんだんとぼやけてきた。

ああ……そうか、なんでこんなに泣きそつなのか……嬉しかつたんだ。現実の弘人君は私を覚えていてくれて……無意識に泣いていたんだ。そこまで心の奥に君が強く根付いていたなんて……でも……よかつた。三年間は無駄になんかなつてなかつた。

「ブレスレット……つく……ひつく……う……うわあああん、わあっ、わあ

あああん」

「ど、どうしました？凪乃！？」

ああ……おかしい、感情の制御ができない……でも、なんでかこの涙は気持ちが良くて流し続けてもいいかななんて思つた。

第2話 動いた歯車（前書き）

ブレスレットの秘密。それはきっと…

第2話 動き出した歯車

やつと……落ち着いた。今度こそ聞かないと……

「弘人、君。」

「？……あ、そうだ。ボクも呼び捨てで構いませんよ」

「あ、そう？……じゃあ、弘人。…………」

よくよく考えたら夢の話は落ち着いてたつて無理じゃない……覚えてないのよ……？

しかももうまく伝える自信がない……」「うなつたら……なにかほかの話でも……

「……ブレスレットは、ビニで……アフ、ビニで？」「

「これ……ですか？」

「ほらつ……困つてゐじやない……」また「これは……7年前に祖父からもらつたんです」……は？？

「屋台で買つたんじやなくて？？」

「え？あ、はい。」

「え？？でも、それ私の（母の）屋台にしか売つてなかつたはず……」

「そつ……そのよ……なのには3年前じゃなくて7年前……おかしい……」

「じゃ、じゃあ今、お祖父さんは？」

「……半年前に天寿を全うしました……」

……。

「待つてて……明日、明日また会いましょう……」

「え？あ、皿乃！？」

いそいでうちに帰りなきや……お母さんと・・お母さんとの話を
して…プレスレットは一体どこから来たものなのかなといと…・・

全速力のダッシュ。今回はもうばてたりしなかった。

走つて玄関を開けて・・お母さんの部屋に……着いた！－！

「お母さん…・・」

私はドアを乱暴に開けてお母さんに聞こへ…・・今度こそ事の真相を
！－！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4447v/>

天の川が見えた8月

2011年10月9日10時17分発行